春の伝道礼拝第2回（5月18日）

互いに愛し合いなさい

東中野教会　浦上　充牧師

ヨハネの黙示録第21章1～6節
ヨハネによる福音書第13章31～35節

皆様おはようございます、そして初めまして。今日は荻窪教会で礼拝を守ることができ、誠に嬉しく思います。東中野教会は荻窪教会と長年にわたって子どもたちの「サマーキャンプ」や「クリスマス会」でご一緒させていただいております。また小海先生は讃美歌委員会の大先輩です。さらに龍口先生は関西学院大学の大先輩でもあります。特に龍口先生には東中野教会が無牧の時期に代務者としてもお世話になりました。

今日は、イエス様から与えられた「互いに愛し合いなさい」という掟の御言葉を共に見つめていきたいと思います。

「互いに愛し合う」ことの困難な現状

20年以上前だったかもしれませんが、テレビで「子どもを抱きしめてあげてください」というCMが流されていて愕然としたことを覚えています。公共の電波でこのような当たり前のことをアピールしなければならない時代になっているのかと愕然としたのです。

私たちの「一番小さな集まり」である「家庭」ですら愛せないのであれば、どうやって他人を愛することができるのでしょうか？

そのような私たちに、イエス様は「新しい掟」として「互いに愛し合いなさい」という掟を与えられました。弟子たちはどのように受け取めたでしょうか。この話は過越しの食卓の上で、また弟子たちの足を洗い、裏切り者がいるという話をされたあとに語られました。そしてこのあとにペトロの離反を予告されます。弟子たちは「そんな筈はありません」と答えましたが、結果としてイエス様の言われた通り、ユダはイエス様を裏切り、ペトロも三回イエス様を知らないと言いました。他の弟子たちもイエス様を裏切り、逃げて行ってしまいました。私たちはこのあとのことを知っています。

イエス様は復活し、弟子たちに大きな赦しを与え、ペトロには三度、「自分を愛しているか」と尋ね、「私の羊を飼いなさい」と新たな使命を与えます。皆、赦されて天への扉が開かれたのです。

しかし、弟子たちの間には大きな問題が横たわっていました。復活されたイエス様は天へと帰って行かれます。物の考え方や行動、あるいは政治思想も違う弟子たちが地上に残されたのです。

これまでは、全く違う方向にいる弟子たちの間にイエス様が真ん中におられてそれをまとめ、同じ方向に歩むことが出来ました。しかし目に見える形でイエス様がおられなくなり、弟子たちは戸惑ったと思います。イエス様がおられない状態で弟子たちは歩まざるを得なくなったのです。そうした弟子たちの心に響いていたのは「互いに愛し合いなさい」というこの新しい掟でした。

キリスト教の信仰とは難しい経典を学んで修行することでも、人里離れてひたすら祈り続けることでもありません。本当は、とても単純なものであると言われています。この新しい掟も、言葉だけを見れば本当に単純なものです。キリスト者以外の人に、キリスト教では「互いに愛し合いなさい」と言っていると言うと、「そうだよね、それは大事だね」と誰もがうなずきます。しかし私たちはこの掟を守ることがとても難しいことを、いやと言うほど、また痛いほど知っています。

私たちは人を愛します。また物や出来事や思い出も大切にします。しかし愛すること、大切にすることはできるのですが、ここに「互いに」という言葉がつくと一気に難しくなってきます。それもその筈。本来「愛」という言葉は一方的なものだからです。

日本語の「愛」という言葉には「互いに」という意味は含まれて

おりません。たとえば、小海先生は愛妻家として知られていますよね。私も小海先生に倣って妻を愛しています。そして神様から与えられた使命として東中野教会を愛し、大切にしています。これは一方的な「愛」です。

では逆に、「互いに」というと、どうなんでしょうか。私は妻に愛されています。また教会に大切にされています。「互いに」とはそう言うことなのですが、口に出すと少し不安になってきます。妻に愛されているんでしょうか。教会に大切にされているんでしょうか。虐げられてはいないでしょうか。改めて考えさせられます。それはなぜかと言えば「愛」は一方的なものだからです。だからこそ「互いに」と言われると私たちは戸惑います。不安になります。

また「愛」という言葉には「優しい」とか「あたたかい」というイメージがありますが、同時に「支配的なイメージ」があることも私たちは知っています。だからこそ、その「愛」の故に、人を傷つけてしまったり、その「愛の重さ」の故に押しつぶされそうになることも私たちは経験していますし、子どもたちも経験しています。

普段、私は明治学院高校で教師としても勤務していますが、この学校は比較的裕福な家庭の生徒が多い学校です。生徒たちは多くの愛を受け取っているだけに生徒たちは多くのストレスも受けています。親の重い愛に応えられない、期待に応えられているのかどうか分からない。そのような不安を感じながら生きている生徒が多い、と感じています。保護者から相談を受けることもあります。お互いに愛を注ぎながら過ごしていますが、ここでも「互いに」ということの難しさを感じています。

もし私が、その人のことを心の底から愛しているとしても、相手がそうでなければ「片思い」で、「互いに愛し合う」ことにはなりません。逆に互いに愛しているとしても、こちらの愛が強すぎる、重すぎると相手をつぶしてしまうことになります。「互いに愛し合う」ためには自分の存在を相手に委ねることが必要となります。「私はあなたのことを愛しています。しかし、あなたが私のことをどう思うのかは、あなたに委ねます」、「あなたがどう受け止めるかは、どうぞ自由にしてください」と言う「余白」が大事なのです。

「私が愛したように」に、「互いに愛し合う」ことのヒントが

イエス様は、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と語られました。読めば読むほど難しいことのように思えてきますが、「互いに愛し合う」ということの大切なヒントが記されています。イエス様は、ただ単に「互いに愛し合いなさい」と言われたわけではありません。その前に、もう一つ「わたしがあなたがたを愛したように」という言葉をつけられました。

私たちが人を愛するのは「私が」であるのと同時に、「イエス様、神様が私たちを愛してくださった故に」ということなのです。私たちはこのイエス様のあるいは神様の愛によって、創造の神秘の内に「新たな者」へと創り変えられ、「互いに愛し合う者」へと押し出されていきます。イエス様が私たちを愛してくださっているが故、私たちも互いに愛し合うことができるのです。

今日の聖書の個所では、そのことを示すように、ペトロの離反を予告し、また14節では同じその過越しの食卓の上で、天に至る道について語られ、そして聖霊を与える約束を弟子たちに与えます。

この「掟」は、私たちの力だけで成し遂げられるものではありません。「互いに愛し合う道」というのは、イエス様の愛を、そしてまた赦しを受け、聖霊の息吹を受けて新たな者へと創り変えられなければ、成し遂げることができない「掟」なのです。

感謝をもって、このイエス様の、神様の思いを受け止め、そして新しい道、愛し合う道へと歩んでいくことを願います。

（出席30名。文責・編集委員会。要約担当・市川義和）